The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	日タイ両言語における「不満表明」に関する研究 : 不満の程度の差による考察
Author(s)	Somchanakit, Kunaj
Citation	大阪大学, 2013, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/26225
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

〔　題　　名　〕日タイ両言語における「不満表明」に関する研究―不満の程度の差による考察―

学位申請者　ソムチャナキット　クナッジ

「不満表明」は、人間関係に摩擦を生じやすい行為であり、文化や言語によって違いがあると考えられる。タイ語の先行研究では、どのようなストラテジーが存在するかについては分析されているが、不満表明に関するタイ語と日本語の対照研究は管見の限り見当たらない。本研究は、日本語とタイ語における「強」と「弱」其々の場面での「不満表明」を対照し、(1)不満表明が行われている場面において、不満の程度の「強」「弱」の違いがどのようにストラテジーの選択に影響するのか、(2) 話し手と聞き手の上下関係、親疎関係がどのようにストラテジーの選択に影響するか、(3) (1)(2)について、日本語とタイ語の不満表明にどのような違いがあるか、(4) 同じストラテジーであっても、使用される言語形式等に日本語とタイ語において違いがあるかどうかを知ることを目的とする。

本研究では、日本語の映画12本とタイ語の映画12本（合計24本：45時間46分）から取り出した不満表明の場面を資料として、不満表明の日タイ対照研究を行った。日本語母語話者2名とタイ語母語話者2名（筆者を含む）に文字化資料を見せて、各場面において、話し手がどの程度の不満を抱いているかを判断してもらい、話し手の不満の程度が高い場合を「強」、不満の程度が低い場合を「弱」とした。次に、「強」「弱」の場面ごとに、上下関係と親疎関係という二種類の要素によって分類し、使用されているストラテジーの違いを分析し、日本語とタイ語における不満表明ストラテジーの使用傾向を対照した。結果は1）～4）のようにまとめられる。

1) 両言語における不満表明の場面の全体的な傾向を考察した結果、日本語では、全99場面中、「強」50.5%(50)、「弱」27.3%(27)で、「強」の場面の方が多く表れた。それに対して、タイ語では、全100場面の中、「強」27.0%(27) 、「弱」50.0%(50)で、日本語と異なり「弱」の場面のほうが多かった。日本語母語話者は、不満が強くないときには不満表明を行わない傾向があるのではないかと考えられる。それに対しては、タイ語語母語話者は、不満度が低い場面でも不満を表明する傾向が強い。

2) 上下別では、両言語共に同等の相手に対する不満表明が一番多い。しかし、日本語の場合は、「上下」35.0%(27)、「同等」46.8%(36)、「下上」18.2%（１４）で、どの相手に対しても不満表明が行われるのに対し、タイ語では圧倒的に同等75.3%(58)が多く、下上の不満表明は5.2%（４）と極端に少ない。目上の相手には不満が表明しにくいと考えられる。

3) 「強」「弱」の不満度別にみると、日本語の場合は、「強」の場面では「上下」「同等」「下上」の全ての相手に不満を表明しているが、「弱」の場面では「下上」の不満表明はなかった。タイ語の場合は、「強」の場面では「下上」の不満表明が3例観察されたが、「弱」の場面では1例だけであった。

4) 日本語は相手との親疎に関わりなく不満表明が現れるが、タイ語の場合は親しい相手に対する不満表明が「親」74.0%を占める。タイ語では、距離のある親しくない相手よりも、親しい相手に対して不満を表明しやすい。タイ語では、同等の親しい相手に対する不満表明が仲間同士の社交の一つとなっているということが明らかになった。

「強」の場面を考察すると、「強」の場面では、両言語ともに、不満を表明する相手は「同等」「上→下」「下→上」の順に多い。しかし、日本語がどの相手に対しても不満を表明する傾向にあるのに対し、タイ語では「同等」が59.2%（16）と圧倒的に多く6割をしめ、「上下」が29.6%(8)で3割、「下上」は11.1%(3)で1割程度と少ない。日本語では、親疎関係に関わらず目下の人に対して不満を表明する（親18.0%(9)、疎14.0%(7)）のに対して、タイ語では、親しい関係の相手に不満を表明する傾向（親40.7%(11)、疎18.5%(5)）がある。「強」の場面で最も使われるストラテジーは、Eea) 修辞的疑問 (Using Rhetorical Interrogation)であり、日本語は35.1%(66)、タイ語は30.7%(39)であった。今回の分析では、「強」場面で、両言語とも、明示的不満表明のストラテジーが、非明示的不満表明のストラテジーよりもよく使われたことが分かった。

次に、「弱」の場面では、両言語ともに、不満を表明する相手は「同等」「上→下」「下→上」の順に多い。しかし、親疎関係に関わりなく、「下→上」の場合、日本語は、0.0%(0)、 タイ語は、2.0%(1)であり、極めて少ない。また、タイ語では「同等」が84.0%(42)で圧倒的に多く8割をしめる。「弱」の場面と親疎関係について、日本語では、親疎関係に関わらず目下の人に対して不満を表明する(親44.4%(12)、疎55.6%(15))のに対して、タイ語では、親しい関係の相手に不満を表明する傾向(親84.0%(42)、疎16.0%(11))がある。また、「弱」の場面で最も使われるストラテジーは、Eea) 修辞的疑問 (Using Rhetorical Interrogation)であり、日本語は38.8%(67)、タイ語は24.8%(28)であった。「弱」の場面は、日本語は、99場面中27場面が「弱」27.3%(27)であった。

結論をまとめれば、両言語では、どの相手に対しても非明示的不満表明ストラテジーよりも明示的不満表明ストラテジーが多く使われる。また、タイ語は、日本語よりも、非明示的不満表明ストラテジーを使う傾向が高いため、タイ語では、日本語より使用するストラテジーの多様性が見られた。例えば、目上は目下に向けて不満を表明する時、Ff. 皮肉・冗談を使用する例がある。「強」場面では、皮肉となるが、「弱」場面では、「明日来たら」「来年来てもいいよ」のように攻撃的なユーモアをこめた皮肉を言うのである。

両言語では、不満を表明しようとする際、相手との上下関係や親疎関係を考慮して行うことが考えられる。不満を表明しないといけない時に、適切なストラテジーを使用して不満表明を遂行することができる。例えば、日本語では、親しくない目上の人に対して不満を表明する場面が幾つか見られるが、その場面で使用するストラテジーは、Eea) 修辞的疑問 (Using Rhetorical Interrogation) であり、丁寧体でも使え、目上の人に対して言及しても失礼とは言いにくいであろう。しかしながら、タイ語では、目上の人に対して十分に丁寧さが表される丁寧体を使う修辞的疑問を使えば失礼な行動になる場合があるため、言語行動には、言語形式よりもストラテジーの方が大事であるということを指摘したい。

様式７

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　　名　（　ソムチャナキット　クナッジ　）			
論文審査担当者		（職）	氏　　名
	主 査	教授	鈴木　睦
	副 査	教授	宮本マラシー
	副 査	教授	小矢野哲夫
	副 査	教授	筒井佐代
	副 査	教授	堀川智也

論文審査の結果の要旨

ソムチャナキット・クナッジ氏の論文は、日本語とタイ語において「不満表明」がどのように行われるかを、日本語とタイ語の現代を舞台とした映画各12本（日本語：24時間45分、タイ語：22時間2分）を資料として対照し分析したものである。論文は162頁で、本文は日本語、タイ語の会話については全て和訳がついている。この研究で扱われる不満表明は、不満の原因を引き起こした相手に対し、相手の引き起こした好ましくない状況、発話、行動を指摘するもので、第三者に対する不満を述べるものは含まれていない。「不満表明」は、人間関係に摩擦を生じやすい行為であると同時に日常生活に不可避なものであり、異文化間のコミュニケーションを考える上で重要なもののひとつであるということができる。「不満表明」についての先行研究は少なく、特に日本語とタイ語の対照研究は、ソムチャナキット（2010）と本稿が恐らく最初のものである。

日本語教育の分野においては、文型（文法）と語彙を中心とした教育からコミュニケーション能力の養成へと重心が移り、目標言語である日本語と学習者の母語との言語行動の違いによる社会言語学的転移、語用論的転移が研究の課題となっている。本研究はこのような言語教育の変化に対応したもので、二言語間の異同を探る基礎研究として位置付けられる。言語行動の対照研究には、同人の専門分野である日本語教育に関する知識のみならず、両言語の高い運用能力とその社会に関する深い知識が必要であり、本論文は言語文化研究科において研究される論文としてふさわしいものである。

本研究は8章で構成されており、大きく以下のように分けられる。

１）不満表明のストラテジーの分類
２）資料に現れた不満表明場面の全体的傾向の分析
３）話し手の不満の程度「強」と「弱」の場面に現れたストラテジーの上下関係と親疎関係別の使用傾向の分析
４）会話全体の特徴の分析

日タイの「不満表明」に用いられるストラテジーの種類は共通しており、もっとも頻繁に使用されるのは「修辞的疑問」であるが、タイ語では「罵り・禁忌」と「皮肉・冗談」が多用される点が日本語と異なっている。どちらの言語においても、１）同等の相手に対して不満が述べられることが多い　２）目上の相手に対する不満は述べられることが少ない、という全体的な傾向は共通しているが、不満度が「強」「弱」の場面に注目すると違いが明らかになる。本稿の結果をいくつか紹介しておく。

・日本語では、不満の程度「強」の場面で不満が表明されることが多く、タイ語では、「弱」の場面が多い。
　　日本語：全 99場面中、「強」50.5%(50)、「中」22.2%(22)、「弱」27.3%(27)
　　タイ語：全100場面中、「強」27.0%(27)、「中」23.0%(23)、「弱」50.0%(50)

・「強」と「弱」の場面において、日本語では、上下関係別ではどの相手に対しても不満表明が行われるのに対し、タイ語では圧倒的に同等75.3%(58)が多く、目上に対する不満表明は5.2%(4)と極端に少ない。

日本語：「上→下」35.0%(27)、「同等」46.8%(36)、「下→上」18.2% (14)
タイ語：「上→下」19.5%(15)、「同等」75.3%(58)、「下→上」 5.2% (4)

・「強」と「弱」の場面において、日本語は相手との親疎に関わりなく不満表明が現れるが、タイ語の場合は親しい相手に対する不満表明が74.0%を占める。
日本語：「親」48.1%(37)、「疎」51.9%(40)
タイ語：「親」74.0%(57)、「疎」26.0%(20)

どの言語においても、世代差、地域差、男女差等々があり、言語行動を一般化することは難しい。しかしながら、本稿の結果からは、不満の程度が弱い間は我慢するが、不満の程度が高まれば、相手との上下関係や親疎に関わらず不満を表明する日本語話者と、目上に対しても目下に対しても疎の相手には不満を表明せず、同等の親しい間柄の相手には不満をポンポン言い合うことを楽しむタイ語話者の姿が浮かび上がる。ソムチャナキット氏は、タイ語では同等の親しい相手に対する不満表明が仲間同士の社交の一つとなっていると述べ、「コレラ野郎」「トカゲ野郎」のような罵り言葉のほとんどは、相手に対する直接的な罵りとして使用されるのではなく、親しい間柄の相手との会話に挟まれる仲間意識を表す付加方略であると結論付けている。

不満表明の発話は単独で現れるわけではないため、本稿では特定の発話だけに注目するのではなく、不満表明場面に現れた複数の発話を丁寧に分類して数値化し、全体の傾向を示すというマクロな分析方法と、資料を不満の「強」「弱」、上下関係、親疎関係ごとに分類して具体的な会話を提示するというミクロな分析方法を併用して、日本語とタイ語の不満表明場面の会話の実態がどのようなものかを示すことに成功している。
日本語の修辞的疑問文がタイ語を母語とする学習者には普通の質問として受け取られる可能性があること、親しい間柄で用いられる皮肉や冗談を使用するタイ語のストラテジーが目標言語である日本語にも持ちこまれる可能性が高いこと、学習者は日本語を使っている場合にも目上の相手には不満を表明しない可能性が高いこと等、日本語教育にとっても示唆に富む論文となっている。
本稿は、先行研究の少ない「不満表明」の日タイ対照研究をテーマとして取り上げたという先駆性、大量の資料を扱った実証的研究であること、日本語教育に寄与する論文であるという点で高く評価できる。上下関係を年齢、社会的地位という外的な条件だけに単純化していること、不満が何に対するものかという場面ごとの要素を考慮しなかったことなど、今後の課題は残るが、今回分析対象としなかった不満度「中」のデータを分析することを含め、今後の研究に期待するものである。
以上の結果を踏まえ、審査委員5名は全員一致で合格と判定した。

以上